

『ちくま評論選』解説

12 巫女の視点 大澤真幸

■凡例	1 ●は、本文。①②：は形式段落番号。◆は、設問。	2 ▽は、本文の追跡・分析。
3 ▼は、読解に関する技法。	4 ☆は、記述に関する技法。	

■追跡

① ●たとえば、柳田国男の「遠野物語拾遺」に採録されている次の説話は、経験を「見る」ということの困難を示すよい隠喩になっている。

土淵村板内の久保の観音は馬頭観音である。その像を近所の子供らが持ち出して、前坂で投げ転ばしたり、また櫓に上りて乗ったりして遊んでいたのを、別当殿が出て行って咎めると、すぐにその晩から別当殿が病んだ。巫女に聞いて見たところ、が、せっかく観音様が子供らと面白く遊んでいたのを、お節介をしたのがお気にさわったというので、詫言をしてやっとな病気がよくなった。この話をした人は村の新田鶴松という爺で、その時の子供の中の一人である。

▽柳田国男（やなぎた、やなぎだではない）は、日本民俗学を確立した人。『遠野物語』はおすすめ。遠野（岩手県）を旅するのも、オススメ！ さて、何の議論なのか、ここまでではまだよくわからないが、それでも、見当はつけておく。「経験を見る」とは困難だ」という主題らしい。隠喩Ⅱメタファー『現キー』。引用されている説話は、別当殿は、経験を見損ねたので病気になってしまった話と読める。が、さて、一体、経験とは何か、それを見るときはどうすることか、なぜ、困難なのか？

② ●この説話を引用してみたのは、ここに、原初の社会学とでも呼ぶべき営みが記録されているからである。【読1】「原初の社会学」というのは、他の諸実践から区別された「社会学」としての固有的方法的な自覚を未だに獲得してはいないが、ここで分析されている当の社会——遠野の共同体——の中では、今日の社会学がわれわれの社会の中で果たしているのと等価な働きを担った知的な営みになっているということである。説話の中で、（原初的な）社会学に対応しているのは、別当の病の原因を看破した巫女の洞察である。

▽かんたんにいえば、どうなるだろう。巫女の洞察は、社会学と同じ働きをしている、といえる。これも☆端的にいつてみる、の応用だ。そこにいろいろな注釈がつくから、文章が複雑になっているが、要するに、巫女は社会学（者）に似ている、という直観がここでの指摘である。ごちゃごちゃしそうないつたら（なる前に）、確かなところをおさえて、かんたんにいつてみる。これは覚えておくべし。

しかし、ここでは、どこがどう同じなのか、よくわからない。読み進めよう。

③ ●この説話がただちに教えてくれることは、経験している世界の本当の姿を見る

ためには、逆説的なことではあるが、見ることを遮ること、見ること自体から離れることが必要だ、ということである。つまり「見ること」は、見ることの否定をも含んでいるのである。

▽経験と見るものの関係が示されている。経験している世界の本当の姿を見るためには、見ることから離れることが必要。：さらに☆具体的に理解しよう。

●このことは、別当にとって世界がどのように見えていたかを考えてみれば、よくわかることである。別当には、馬頭観音は、なれなれしく接したり一緒に遊んだりしてはならないものとして現れていたはずだ。つまり、別当にとっては、馬頭観音との関係の内に、決して還元すべきではない距離——崇拜を可能にする距離——が介在して、いなくてはならないのである。別当が子供たちを叱ったとき、馬頭観音のこのようなあり方は、別当自身にとってまぎれもない「真実」である。しかし、◆問1それは誤っていた。つまり、子供たちを叱るときに別当が「真実」として見ていたものは、別当自身が経験していたはずのものとは異なっていたのである。この自分自身の否定が、別当の身体の上に兆候として現れることになる。

▽還元（『現キー』参照）は元に戻す、分解する。ここでは、それ以上近づいてはならない距離があるという意味。別当に見えていたのは、それ以上近づいてはならない距離を破って子どもが近づいているということであった。しかし、それは本当の姿ではなかった。本当の姿を見るためには、別当はさっきの見方を遮る必要がある。つまり、さっきの自分の見方を否定しなければならぬ。そこで、説話の上では、彼は、見ること（↓子供たちを叱ること）ができない状態、すなわち病という状態に置かれることになる。

◆問1「それ」とは何をさすか。

「別当の考え」なんて答えた人はないやろね。その内容を答えるのですぞ。A「馬頭観音は、なれなれしく接したり一緒に遊んだりしてはならないもの」、B「馬頭観音との関係の内に、決して還元すべきではない距離——崇拜を可能にする距離——が介在してはなくてはならない」という二つの「てはならない」をチェックしましたか！ Aだけ、Bだけでも書けるが、Aの意味を解いたBの表現もほしい。

【解答例】「馬頭観音とは、なれなれしく接してはならず、崇拜を可能にする一定の距離を保たなければならないという考え。」

④ ●別当が病に倒れるのは、なぜだろうか？ 民間伝承の水準では、この病は、観音さまの復讐やたたりとして解釈されるだろう。もちろん、このような解釈は、起こったことを直接に合理化するためのよくある虚構であり、病にかかったということのトートロジカルな（同語反復的な）言い換えでしかない。

▽病にかかるⅡ見えなくなる。トートロジー（tautology）Ⅱ特に繰り返したからといって何の意味も明瞭さも付け加えないような同じ言葉の繰り返し。同語反復。

復讐という解釈は、物語としての筋道をつけるためのもの、というのが筆者の考え。「どうして病気になったのか」あたりだ、前世の因縁だ」といった因果関係を用いた解釈は、昔からよくある〈合理化〉の方法だ。〈合理化〉というのは、納得のためになされる説明。さすがに「たたり」を持ち出す人は今は少ないかもしれないが、「晴れ女」がいたから晴れた、とか、「雨男」が来たので雨になった、とかいうことを半ば本気で言いつける人はよく見かける。「血液型▷型の人は…」などというのと同じ。冗談めかしているようで、じつはそういった認識パターンから逃れられないでいる。そういう点で、この〈民間伝承〉的解釈の水準は、決して過去のものではない。

⑤ ●問2病という兆候は、次のことを意味しているだろう。子供たちと同様に、別当自身も、身体の水準では、「観音さまも楽しく遊びたいはずだ」、つまり「観音さまと親しく交わっても良いはずだ」ということを知っているのである。しかし、馬頭観音と遊ぶ子供たちを叱りとばしているとき、彼の言葉は、この身体の水準を裏切っていることになる。身体的な水準で見ているものを、言語的な水準——言語において記載される水準——で見るができなかったのである。身体がすでに見ていたものを言語の方が否定したことに対する、身体の反作用として、兆候（病）が現象することになるわけだ。

▽この説明、理解できましたか。身体の（無意識の）レベルでは、彼は遊びが悪くないことを知っていた。しかし、言語の（意識の）レベルでは、遊ぶのは悪い、といっってしまった。そういうこととてありませんか。ほんととはそれも「あり」だどこかで思っているのだが、口では、「ぜったいダメ」といつてしまう。逆に、ほんととは、それはアカンで、と思っているのだが、口では「いいよ」といつてしまう。言葉が身体（無意識の心）を裏切る。このとき、何が起きるか。裏切られた身体が病気になってしまうのである。ちなみに「うらぎる」の「うら」とは心のこと。心が切り裂かれるわけだ。「うらない」「うらむ」「うらやましい」「うらがなしい」などの「うら」も心。「おもて」は顔。

◆問2「病という兆候」は何を意味するか。

〈押さえ〉は、「身体の反作用」だ。☆端的にいうなら、病⇨身体の反作用。反応。そこに修飾語をつけていく。まったくの抜き出しでも、答えにはなっている。

〔解答例1〕「身体がすでに見ていたものを言語の方が否定したことに対する、身体の反作用。」

もう少ししていねいにした例。是認↓否定とか肯定↓否定といった対を使う。

〔解答例2〕「身体の水準では認めていたものを言語の水準で否定したことによって生じた矛盾に対して、身体が何らかの反応を示していること。」

⑥ ●だから、別当にとっては、身体の水準で生きそして見ているものと、言語の水準で自らが「生きそして見ていると自覚していること」とが一致していないのである。さらに、付け加えておけば、消極的には、子供たちにとっても同じ不一致があると言わなくてはならない。別当に叱られ、それに従っている限りにおいては、子供たち自身も、その身体性の水準を正確に自覚しているわけではないからである。

▽不一致とは何か。（身体の水準で・生きそして見ているもの）⇨（言語の水準で・生きそして見ていると自覚していること）。別当にも子どもにも、その不一致がある。

⑦ ●これと同じ〔読2〕構造の不一致を、カール・マルクスが『資本論』の有名な一節の中で指摘している。マルクスは、商品の価値ということについて、いわゆる労働価値説に立脚している。労働価値説に従えば、ある商品とある商品が交換されたり、等価と見なされるのは、それぞれの商品の生産に投下されている人間労働——ただしその質的な差異性を捨象した抽象的人間労働——の量が等価だからである。つまり、（抽象的）人間労働の量的な規定性にまで還元した場合には等価であるということが、市場における商品の交換の（論理的な）前提をなし、それを保証していることになる。ところが、一見、このような理解に反するかにように、マルクスは次のように叙述しているのである。

人々が彼らの労働生産物を互いに価値として関連づけるのは、当の物件を同種の人間的労働の物的外被だとみなすが故ではない。逆である。人々は、交換において、彼らの異種の生産物どうしを価値として等置することによって、彼らの異種の人間的労働として等置するのである。

▽「むずかしい」と感じたのではないか。引用文というのはたいいてい「よくわからない」ものである。マルクスを知っている人には、ははん、あのことやな、てなもんだが、諸君はたぶんマルクスを読んだことはない（でしょ？…でも、大学に入ったら読みや）。しかし、書き手としては、おれのいつてるのと同じことを、かのカール・マルクスだっているんだぞ、といたいわけである。

引用文理解の基本は？ ▼前後の地の文を手がかりにする。理解を急がず、ここなら、次の⑧⑨段落あたりまで読んでいけば、意味が見えてくる。最悪、マルクスの部分がわからなくても、⑧や⑨でのいいかえを理解しておけばいい。

マルクスの引用部分をこの文章の主旨に沿って、一部大阪弁でいいかえておく。

人々が、ある労働生産物（商品）と別の商品が同じ価値のものだと見なすのは、その生産物を作り出すのに同じだけの労働がつき込まれたためだと初めから考えているからではおまへん。逆でんねん。人々は、実際に生産物を交換するときに、例えばそのステテコ・ダースと米一キロを、同じ価値でんなあ、と、まず認め合って、交換してしまつてから、双方の商品の生産につきこまれた労働は同じ、と後から考えるのである。 ※すててこ＝ズボン下の一種。さるまたより長く、膝の下あたりまである。

⑧ ●ここで指摘されていることは、等置という行為の前提となるべきことがらが、その行為に対して遅れてやってくるように見えるということである。つまり◆問3自らの前提が、後から適及的に満たされるかのようなのだ。マルクスは、右の文章に続けて、次のような含蓄深い言葉を付け加える。

人々はそのことを意識しない、だが、それを行うのである。

▽遡及Ⅱさかのぼること。含蓄Ⅱ深い意味がこもっていること。

「等置という行為の前提となるべきことがら」とは、先の例では、「労働の価値が同じ」ということ。「その行為に対して遅れてやってくるように見える」というのは、「労働の量（価値）が同じや」というのは、等置し、交換するという実際の行為が終わつてから、考えたらそういう前提になっているのに気づく、ということである。

とりあえず、後から考えたら、と表現したが、「人々はそのこと（前提）を意識しない、だが、それを行う」というマルクスの表現に忠実に考えるなら、後から前提を意識・自覚するのではなく、行っているときには、前提は意識されていない、という点こそが重要である。

◆問3「自らの前提」とはどのようなことか。

⑦段落の労働価値説の説明部分に注目。

「ある商品とある商品が交換されたり、等価と見なされるのは、それぞれの商品の生産に投下されている人間労働——ただしその質的な差異性を捨象した抽象的人間労働——の量が等価だから」。

ひっくり返すと、

「それぞれの商品の生産に投下されている人間労働の量が等価だから

↓ある商品とある商品が交換されたり、等価と見なされる」。

傍線部が、「前提」にあたる。

「解答例1」「それぞれの商品の生産に投下されている人間労働の量が等価であるという前提」。

次は、交換される場合の前提、という意味をきちんと入れた例。

「解答例2」「商品どうしが等価と見なされ交換される場合、それぞれの商品の生産に投下されている人間労働の量は等価であるという前提」。

⑨ ●この最後の言葉は、前提とその帰結との間に転倒がどこで生じているのかを説明している。前提が適及的に充足されるのは、行為の水準（それを行うのである）であって、意識の水準（そのことを意識しない）ではない。つまり、人々が身体的な水準において現に行っていることと、「行っている」と言語的な水準で把握していることとの間には、ずれがあるのだ。人々は、まさに行っていることを、言語において表現されるような形式においては見えていない、ということになる。先の説話の中で、別当の病という兆候が示しているのも、これとまったく同じタイプのずれである。別当は、身体的にはすでに馬頭観音と人々の親密な関係を承認しているのに、そのことを意識していないのだ。

▽むしろかしそうな語句は、適宜いいかえつつ、確認していく。言い回しが難しそうでも、じつはいっていることはそうでもないという場合が多い。▼ビビるな！

「前提とその帰結との間の転倒」↓ある考えを前提として、ある行為が帰結する、と常識的・論理的には考えるが、実際に生じているのは、行為という帰結のほうが（先

に）実現していて、前提はその（後に）自覚される。ここには、論理的な前／後の順序の転倒が生じている。

「前提が適及的に充足される」↓前提は後から影響を与える。前提というのは、ここでは、真実ということだと考えていい。別当の話では、「観音様と遊んでいい」が前提Ⅱ真実。マルクスでは「商品の価値Ⅱ労働の量」が真実。それらの前提Ⅱ真実が力を発揮するのは、行為の水準だというのはどういうことか。別当の話では、言語の水準では、「遊ぶな」と発言しており、真実は生きていない（注。発言することはこの例話の場合、行為の水準ではない。言語の水準）。しかし、本人も知らないうちに、行為（身体）の水準には力をおよぼしていて、彼は真実を裏切った言葉を発したせいで、病気になる。彼は身体（行為）的な水準ではとくに「遊んでいい」と思っていたのである。マルクスの例では、商品の交換をする人々は、行為の水準で「商品の価値Ⅱ労働の量」だという真実を承認していることになる。

⑩ ●要するに、別当に対して現れている世界が、複層的に構成されているのである。すぐに言語化され意識される層、つまりさしあたって見えている層が、表層である。しかし、その下に、もう一つの層、身体的な層がある。しかも、これら二つの層はきれいに順接しておらず、逆接している。（一方の層で見えていることが、他方の層で否定される。）この逆接が強い「無理」が、病として現れているのである。病は、言ってみれば、地表に露出した深部の地層のようなものである。

▽整頓。1「すぐに言語化可能な層」Ⅱ表層

2「身体的な層」「すぐには言語化できない層」Ⅱ深層

⑪ ●このような別当の世界の◆問4内的な複層性は、さらに、この説話が実感をもつて語られ、受け継がれている共同体の社会構造自身がこれと同型的な複層的な構成をとっているのではないか、との類推を誘う。

▽この説話にリアリティを感じるからこそ、この話は伝わっている。リアリティを感じているのは、遠野の人たち。遠野の社会の構造も、表の層／深い層の二つから成っているのではないか、という仮説である。

◆問4「内的な複層性」とはどのようなことか。
さきの整頓を利用。

「解答例」「すぐに言語化可能な表層のすぐ下に、もう一つの身体的な深層があること」。

●観音像は、村落の共同体の統一性を保証するような超越性を具現しているだろう。説話は、この超越性を準拠点にして、二種類の（社会的な）関係性が張られていることを示唆している。一方には、観音像を共同体の中の生きた仲間のようなものに見えるし、子供たちが楽しければ相手の観音像も楽しいはずだという快楽の相互反射の関係の内に観音像を位置づけるような感覚が生きている。つまり、超越的な存在が、相互

反射的な二者関係から明確に離陸していないのである。しかし、他方で、説話は、「観音像をなれなく扱ったり、粗末にしてはならない。」という禁止が成り立つような関係の様態が、この共同体の中に確立されていることも示しているだろう。この種の禁止が成り立つ関係とは、観音像を共同体の成員たちの相互的な規定の関係から距離化された場所に位置づけ、観音像の存在が——そして観音の超越性を代行するもの（たとえば説話の中では別当）が——一方的に成員たちの行為を規定するような関係のことである。別当の怒りの忠告が功を奏したことから示されるように、少なくとも表面的には、この共同体の内部では、後者の関係性が支配的なものとして現れている。

▽対比ツール。二種類の……でピンと来なくては！「一方には」「他方で」をチェックできたか？しかし、ここは三つに整理しなくてはならない。

0 観音像Ⅱ村の統一性を保証する超越的存在。

1 観音像Ⅱ相互に楽しむ共同体の中の生きた仲間（深層。子供たちに象徴される）

2 観音像Ⅱ一方的に成員たちの行為を規定する存在（表層。表面的には支配的に象徴される）

神さまみたいなもので、村をつなぎあわせるヘソのような存在なのだが、二つの顔があつて、一つは同じ仲間というやさしい顔、もう一つは支配者という厳しい顔。

⑫ ●前者の関係性——超越的な観音を共同体内の相互的な反射の方に解消しようとする関係性——は、説話の中では、子供たちによって代表されている。もちろん、これは、別当の内的な世界の中では、身体性の水準に対応しよう。後者の関係性——観音を隔絶した超越性として確保することで営まれる関係性——は、子供たちを叱る別当によって代表される。こちらは、別当の内的な世界においては、言語性の水準に対応する。

▽対比ツール。前者／後者。相互的観音像／身体性の水準／超越的観音像／言語性の水準。

●最後に、表面的な後者の優越とは裏腹に、究極的には◆問5前者こそが社会構造全体の要であり、後者を支え規定していることを示す要素は、つまり病という身体的な兆候に対応する社会構造上の要素は、巫女である。

▽長い文になっているが、前半と後半に分けておこう。

・表面的な後者の優越とは裏腹に、究極的には前者こそが社会構造全体の要であり、後者を支え規定している。↓じつは、相互的観音像のほうで、根本的なものだ。

・それを示す要素Ⅱ巫女。↓巫女は、表層では見えなかったことを見せてくれる。巫女によって、村人は真実（前提）を知る。

◆問5「前者」とは何をさすか。

抜き出しでいいなら、

「解答例1」「超越的な観音を共同体内の相互的な反射の方に解消しようとする関係性。」

わかりやすく、という注文が付いたら、⑪段落の表現を借りて、

「解答例2」「観音像を共同体の中の生きた仲間のようなものと考え、お互いに楽

しさを与え合おうとする関係。」としてもいい。

⑬ ●【読3】社会的な経験を（見る）ためには、ある意味では、見ることを否定しなくてはならない。経験の深層に到達するためには、表層における視点を離れ、もう一つの別の視点に移らなくてはならない。見ることの否定は、この視点の移行のための前提条件になるのだ。そして、移行先になるその「もう一つの別の視点」こそが、説話の中では、巫女によって具体化されているのである。説話の中で、ただ巫女だけが、経験されていることの（真実）を見ている。言い換えれば、巫女だけが、人々がそうとは意識することなく行っていることを見ることができるのである。たとえば巫女は、別当でさえも、観音と人々との相互反射的な関係をすでに承認しており、そのような承認を基礎にして他の諸経験を積み上げているというところを見抜いている。

▽巫女だけが、すべてを見ている。巫女は「もう一つの別の視点」をもっている。マルクスが、人々がそうとは意識せず、商品の価値についての真実に基づいて交換を行っていることを見抜いていたのは、ある意味で巫女的な視点をもっていたからである。

●社会的な秩序を結節する経験の構成を認識するということは、まさにこの「◆問6人々はこれを意識しないが、しかし、これを行う。」と言われるときのその行っていることを見ることにはかならない。

▽「行っていることを見る」とは、身体の水準を見る、ということである。どんな経験が社会の秩序を構成しているのか、その根本的なこととは何なのか、それは表層ではなく、深層を見ることがある。深層を見るためには、表層を見ることになってしまった目をいったんふさがなくてはならない。見ることの否定とは、表層を見ることの否定という意味である。問6は⑭の後で。

⑭ ●それにしても、社会的に重要なことは、別当や子供たちの経験の（真実）が、別当の内的な視点に対してではなく、また子供の視点に対してですらなく、巫女というどちらにとっても他者である視点に対して、現れるということである。別当の悲劇をもたらししたのは、自ら自身が経験している世界が、自ら自身の視点に対して死角になっているということである。人が自ら行っていることを意識しないことの究極の原因はここにある。行為や経験において選択されていることが、それに対して一貫性を呈するような視点は、まず第一義的には、行為したり経験している当人の視点ではなく、他者の視点なのである。行為・経験は、その他者に対して意味あるものとして意識されうるのであり、行為したり経験したりしている当人にとっては、さしあたって、把握しがたい不合理として立ち現れるのである。

▽重要なことは。「行為したり経験したりしている当人」のやっていることについて、一貫した説明ができるのは、当人ではない。それを外から見ている巫女的存在なのである。②段落で、巫女の洞察が社会学の機能と同じだ、といったが、そう

ると、社会学とは、現実の社会での行為・経験について、一貫した説明が可能な真実を見出すものということになる。

◆問6「人々はこれを意識しない」というのはなぜか。

⑭段落「人が自ら行っていることを意識しないことの究極の原因はここにある」をチェック。「ここ」とは？ 直前の文。

〔解答例1〕「自ら自身が経験している世界が、自ら自身の視点に対して死角になっているから。」

少し書き換えた例。

〔解答例2〕「自分自身が経験している世界は、自分自身の視点からは見えないから。」

なぜ、見えないのですか、と、もう一度訊きたくなるが、これ以上は本文からはわからない。自分で自分は見えない、視点をずらさないと見えない、というのは経験上、直観的に理解できるけれど。そして、たぶんこれは真実だ。他者の視点の大切さがここから導かれる。

■読解問題1「「原初社会学」というのは、他の諸実践から区別された「社会学」としての固有の方法的な自覚を未だに獲得してはいないが、ここで分析されている当の社会——遠野の共同体——の中では、今日の社会学がわれわれの社会の中で果たしているのと等価な働きを担った知的な営みになっている」とあるが、筆者は「社会学」の働きをどのようなものと考えているか、説明しなさい。六〇字以内。

☆答案までの手順を学習せよ。

この直後、「(原初的な)社会学に対応しているのは、別当の病の原因を看破した巫女の洞察である」とある。∴社会学Ⅱ巫女。巫女についての言及は、⑫⑬⑭。巫女の機能を説明したところが、すなわち、社会学の機能を説明したところになるはずだ。

⑬に集中して現れる、〈巫女は：～を見ている〉という内容を拾い出そう。

- ・巫女は、経験されていることの真実を、見る。
- ・巫女は、人々が意識することなく行っていることを、見る。
- ・巫女は、(別当の)経験の真実を、見抜いている。
- ・続く、

「社会的な秩序を結節する経験の構成を認識する」

というのも、巫女が：～を見る、に対応する表現であることがわかる。

- ・巫女は、(社会的な秩序を結節する)経験の構成を、認識する。

※社会的な秩序Ⅱ社会構造。※結節Ⅱ結び合わせること。

巫女を社会学に置き換えてまとめる。

- ・社会学は、人々が意識することなく経験していることの真実を見抜く。

さらに、視点というキーワードを入れて、～することによって、を補う。

- ・社会学は、経験している人とは違う視点に立つことによって、人々が意識することなく経験していることの真実を見抜く。

社会学のことなので、「社会的な秩序を結節するⅡ社会の構造を形成している」という修飾句を使う。意識することなくⅡ無意識の、深層の。

- ・社会学は、経験している人とは違う視点に立つことによって、深層において社会の構造を形成している諸経験の真実を見抜く。

〔解答例〕「経験している当人とは違う視点に立つことによって、深層において社会の構造を形成している諸経験の真実を明らかにする働き。」

■読解問題2「構造の不一致」とはどのようなことか、説明しなさい。六〇字以内。

▼キーワード探索。「不一致」「一致」で探すと、⑥段落「身体の水準で生きそして見ているものと、言語の水準で自らが『生きそして見ていると自覚していること』とが一致していない」が見つかる。

また、「身体の水準」「言語の水準」で見ると、⑨段落「人々が身体的な水準において現に行っていることと、「行っている」と言語的な水準で把握していることとの間には、ずれがあるのだ」が見つかる。同じ主旨であることは明らかだ。

〔解答例〕「身体的な水準において現に行っていることと、言語的な水準で自覚的に把握していることとが一致せず、ずれがあること。」

■読解問題3「社会的な経験を〈見る〉ためには、ある意味では、見ることを否定しなくてはならない」というのはなぜか、説明しなさい。一二〇字以内。

☆なぜ型↓どのように型。まったく同じ構造の文が次に続く。どのようにすることなのか、をある程度説明している。

「経験の深層に到達するためには、表層における視点を離れ、もう一つの別の視点に移らなくてはならない。」

さらに、何のためにそうするのか、そうしたら、何が得られるのか、といったところを含めたい。全体を見渡して。二文の対応から、解きほぐしていく。

- ・社会的な経験を〈見る〉↓経験の深層に到達する
 - ・見ることを否定↓表層における視点を離れ、もう一つの別の視点に移る
- 前者には、肝心な社会的な経験とは深層の経験なのだという注釈が必要。⑫の終わり、「前者こそ社会構造の要」といった主張に注目。

後者には、別の視点から何を見るのかを補う必要あり。見てどうするのか、を書かないと、なぜ、に対する解答としては不足。

〔解答例〕「社会を形成している経験の深層こそが、社会構造の要であり、それを認識するためには、社会の表層だけを見る視点から離れ、もう一つ別の視点に移動することによって、人々がそうとは意識することなく行っていることを見なくてはならないから。」